

エクアドル2015 INAS グローバルゲームスにおける 知的障がい者バスケットボールの現状

齋藤 利之

1. はじめに

4回目となる Inas^{註1)} Global Games^{註2)}は、これまで主に欧州で行われてきたが、今回は南米での初開催となった。しかし南米での開催は、開催前から多くの不安要素が挙げられ、その1つが競技会場の立地環境にあった。実施されるすべての競技が高地（2500～2800m）で行われる事が決定しており、選手・スタッフの体調管理が懸念された。そこで日本パラリンピック委員会は（以下、JPCと称す）医療チームを編成し、本大会に参加する競技団体に対し医科学講義などを実施し、事前の準備に十分な時間と労力を費やすことになった。更に、ハード面においては高酸素機器の導入やパルスオキシメーター^{註3)}の配布等、選手の安全を最優先とし日本選手団を結成した。しかし、大会一ヶ月前に競技会場近くの「コトパクシ山」の火山活動が活発化し、エクアドルのコレア大統領は非常事態宣言を発令した為、大会直前になって会場が首都キトからグワヤキル等の平地へ変更となった。尚、グワヤキルは標高4mであるため懸念されていた体調面は払拭されたが（一部は高地での開催）、逆に、競技施設や宿泊ホテルの確保、輸送体制等のオペレーティングが全く機能せず、例えばグワヤキルにおける日本選手団のホテル（宿泊先）や競技会場は、現地に着いてから判明するなど混乱を来す事となった。また、競技会場も同様であった。

しかし、大会が進むにつれ徐々に様々な問題が解消されたが、競技日程の急な変更や参加国の突然の辞退（棄権含む）など、多くの問題を抱えたまま最終日を迎えたことは大変残念であった。確かに競技会場（都市）の大幅な変更に伴う不具合はやむ得ない部分もあるが、それ以上に大きな混乱を招いた原因として大会組織委員会の機能不全が挙げられる。特に大会初日に

責任者が急遽辞任するなどした事は、事態を更に悪化させた最大の原因・要因と言える。

それらを鑑み、多くの困難の中、日本選手団は体調不良を訴える選手もいなく、帰国できたことは大きな自信となった。

2. 大会の概要

2-1 全 体

- 大会名称：Ecuador 2015 Inas Global Games
- 大会期間：平成27年9月20日(日)から平成27年9月27日(日) 8日間
- 参加予定国：34カ国
- 参加予定人数：約700名(46名) ※カッコ内は前回大会(2011年)の日本選手団実績
- 競技種目：9競技(陸上競技・水泳・卓球・自転車(ロード)・自転車(トラック)・ローイング(屋外)・ローイング(屋内)・フットサル・バスケットボール・テニス・テコンドー)
- 日本選手団：(表1)
- バスケットボール競技日程：(表2-1～6)

表1 日本選手団構成

NO	区分	選手		選手数 合計	コーチ・ スタッフ数	医療スタッフ数	スタッフ 合計	合計	帯同審判
		男子	女子						
1	陸上競技	20	14	34	10	1	11	45	0
2	水泳	19	7	26	11	1	12	38	0
3	卓球	4	0	4	2	0	2	6	1
4	フットサル	10	0	10	5	0	5	15	0
5	バスケットボール	10	10	20	6	0	6	26	1
6	本部役員(団長含む)	0	0	0	10	2	12	12	0
	合計	63	31	94	44	4	48	142	2

表 2-1 競技時日程と対戦相手

Day 1	21-Sep	Time	M/N	Gender	Format	Stage	Home	Away
		10:00	W1	Women	3V3	Round Robin	Australia Gold	Australia Green
		10:30	W2	Women	3V3	Round Robin	Japan White	Japan Black
		11:30	M1	Men	5V5	Round Robin	Portugal	Venezuela
		13:30	M2	Men	5V5	Round Robin	Japan	Poland
		15:30	M3	Men	5V5	Round Robin	Australia	France
		17:30	W3	Women	3V3	Round Robin	Australia Gold	France Women
		18:00	W4	Women	3V3	Round Robin	Japan White	Australia Green

表 2-2 競技時日程と対戦相手

Day 2	22-Sep	Time	M/N	Gender	Format	Stage	Home	Away
		10:00	W5	Women	3V3	Round Robin	Japan Black	France Women
		10:30	W6	Women	3V3	Round Robin	Japan White	Australia Gold
		11:30	M4	Men	5V5	Round Robin	Australia	Venezuela
		13:30	M5	Men	5V5	Round Robin	France	Japan
		15:30	M6	Men	5V5	Round Robin	Poland	Portugal
		17:30	W7	Women	3V3	Round Robin	Australia Green	Japan Black
		18:00	W8	Women	3V3	Round Robin	France Women	Japan White

表 2-3 競技時日程と対戦相手

Day 3	23-Sep	Time	M/N	Gender	Format	Stage	Home	Away
		10:00	W9	Women	3V3	Round Robin	Japan Black	Australia Gold
		10:30	W10	Women	3V3	Round Robin	Australia Green	France Women
		11:30	M7	Men	5V5	Round Robin	France	Poland
		13:30	M8	Men	5V5	Round Robin	Australia	Portugal
		15:30	M9	Men	5V5	Round Robin	Japan	Venezuela
		17:30	W11	Women	3V3	Round Robin	Australia Gold	Australia Green
		18:00	W12	Women	3V3	Round Robin	Japan White	Japan Black

表 2-4 競技時日程と対戦相手

Day 4	24-Sep	Time	M/N	Gender	Format	Stage	Home	Away
		10:00	W13	Women	3V3	Round Robin	Australia Gold	France Women
		10:30	W14	Women	3V3	Round Robin	Japan White	Australia Green
		11:30	M10	Men	5V5	Round Robin	Japan	Australia
		13:30	M11	Men	5V5	Round Robin	France	Portugal
		15:30	M12	Men	5V5	Round Robin	Poland	Venezuela
		17:30	W15	Women	3V3	Round Robin	Japan Black	France Women
		18:00	W16	Women	3V3	Round Robin	Japan White	Australia Gold

注：フランス女子は、棄権したため没収試合となった。

表2-5 競技時日程と対戦相手

Day 5	25-Sep	Time	M/N	Gender	Format	Stage	Home	Away
		10:00	W13	Women	3V3	Round Robin	Australia Green	Japan Black
		10:30	W14	Women	3V3	Round Robin	France Women	Japan White
		11:30	M10	Men	5V5	Round Robin	Japan	Portugal
		13:30	M11	Men	5V5	Round Robin	France	Venezuela
		15:30	M12	Men	5V5	Round Robin	Australia	Poland
		17:30	W15	Women	3V3	Round Robin	Japan Black	Australia Gold
		18:00	W16	Women	3V3	Round Robin	Australia Green	France Women

注：フランス女子は、棄権したため没収試合となった。

表2-6 競技時日程と対戦相手

Day 6	26-Sep	Time	M/N	Gender	Format	Stage	Home	Away
		10:00	W13	Women	3V3	3位決定戦	Australia Green	Japan Black
		10:30	W14	Women	3V3	1位決定戦	Australia Gold	Japan White
		11:30	M10	Men	5V5	3位決定戦	Portugal	Australia
		13:30	M11	Men	5V5	1位決定戦	Venezuela	France

注：W14とM11の後に、それぞれ表彰式が行われた。

2-2 参加国について（バスケットボール競技）

○参加国 男子6カ国（日本、オーストラリア、フランス、ポーランド、ポルトガル、ベネズエラ）

女子3カ国（日本、オーストラリア、フランス）

3. 試合結果

【男子】予選（表3）

表3 男子星取表

国名	POR	VEN	POL	日本	FRA	AUS	勝	敗	勝点	順位
ポルトガル		×37-43	○37-22	○46-38	×39-44	○52-37	3	2	8	3
ベネズエラ	○43-37		○76-35	○74-41	○83-60	○56-26	5	0	10	1
ポーランド	×22-37	×35-76		×44-53	×16-36	×47-60	0	5	5	6
日本	×38-46	×41-74	○53-44		×30-54	×35-61	1	4	6	5
フランス	○44-39	×60-83	○36-16	○54-30		○78-43	4	1	9	2
オーストラリア	×37-52	×26-56	○60-47	○61-35	×43-78		2	3	7	4

最終順位

- 1位：ベネズエラ
- 2位：フランス
- 3位：ポルトガル
- 4位：オーストラリア
- 5位：日本
- 6位：ポーランド

【女子】予選 (表4)

表4 女子星取表

国名	Round1					Round2					勝	敗	勝点	順位
	AUS	AUS	JPN	JPN	FRA	AUS	AUS	JPN	JPN	FRA				
	金	緑	白	黒		金	緑	白	黒					
オーストラリア 金	/	○16-10	○20-10	○17-3	○21-6	/	○15-6	○15-7	○19-6	○2-0	8	0	16	1
オーストラリア 緑	×10-16	/	×14-16	○16-8	○8-5	×6-15	/	×9-13	○14-11	○2-0	4	4	12	3
日本 白	×10-20	○16-14	/	○19-4	○16-3	×7-15	○13-9	/	○13-8	○2-0	6	2	14	2
日本 黒	×3-17	×8-16	×4-19	/	○8-7	×6-19	×11-14	×8-13	/	○2-0	2	6	10	4
フランス	×6-21	×5-8	×8-16	×7-8	/	×0-2	×0-2	×0-2	×0-2	/	0	8	8	5

注：フランスは、ラウンド2を棄権。

最終順位

- 1位：オーストラリア (GOLD)
- 2位：日本 (WHITE)
- 3位：オーストラリア (GREEN)
- 4位：日本 (BLACK)
- 5位：フランス

4. INASが目指す Intellectual Disability Basketball (以下 ID バスケットボール)

今回、女子のみ3×3が正式種目として行われた。参加国は、日本・オーストラリア・フランスの3カ国のみで行われ、しかも日本とオーストラリアはチームを2つに分け、合計5チー

ムという形で実施に至った。さらに、もう1つの参加国フランスは、大会4日目（予選ラウンド2）から棄権するという事態に見舞われ、最終的に4チーム（2カ国）でのメダル争いとなった。一方、このような状況に関わらず、INASとしては、引き続き3×3の普及に努めるといふ。その最大の理由に、パラリンピックへの復帰が挙げられる。IDバスケットボールがパラリンピックに復帰するための最低条件として24カ国の参加が必須となる^{註4)}。そもそも今大会において女子は男子同様、通常の形（5×5）で行われる予定であったが、参加国が少ない事から最終的には3×3になった経緯がある。では、何故5×5での参加（開催）が困難であるのか。やはり最大の理由は経済的側面が大きな影響を及ぼしているからであろう。バスケットボールは通常1チーム12名の選手で構成され、その他監督・コーチ・アシスタントコーチ・マネージャー・トレーナー等のスタッフを入れると1チーム15名前後となる。それが男女であれば約30名となるため、移動には多くの費用がかかる。例えば今回の日本選手団（バスケットボール）で言えば、男女とも選手を10名に絞り、且つスタッフも一部男女兼用という体制で臨んだが、最終的には合計27名となり、必要経費（実費）は一人約50万円を要し合計で約1350万円の予算が計上された。つまり各国とも地理的な条件はあるにせよ、これだけの費用がかかるため5×5で参加を見合わせる国が相次いだという見方ができる。勿論、各国においてそれ以外の理由があるか明確でないため引き続き調査が必要と思われる。いずれにしても、今後を見据え参加国を増やす1つの打開策としてINASは3×3実施を推奨している。

また、INASバスケットボールのスポーツディレクターであるLorraine氏（写真1）は、正式発表ではないが次回オーストラリアで行われる第5回大会（2019）では、男女とも3×3を



写真1 Lorraine氏

正式種目として開催し、5×5は行わない方向で調整したいとの見解を示した。

5. クラス分けに関する INAS の取り組み

2000年のシドニーパラリンピック大会において、スペインのバスケットボールチームが、健常者を大会に派遣し（登録）優勝した事態を重く見た IPC は、2004・2008年のパラリンピックにおいて全ての競技から知的障がい者部門を排除した。その後、各 IF^{註5)}の努力により、2012年のロンドンパラリンピックにおいては、水泳・陸上・卓球の一部の種目の復帰が認められた。INASとしては、パラリンピックへの全面復帰に向け、IQテスト等の正確なクラス分けが急務であり、それに関する具体的な共通テストを模索している。そこで今回、INASは専門家を現地に派遣し、いくつかのテストを全選手（すべての競技）に課した。そのテストは、大きく3つに大別される。1つは、実際にボールとバスケットゴールを使用し1対1及び2対2において、ディフェンスにおける様々なシチュエーションを与え（例えば意図的にノーマークを作る等）、オフェンス時にどのような選択を選手が行うかといった調査が実際のコートを利用して行われた（男女）。次にパソコンやカードを使用し、与えられた残り時間を基に今パソコンの画面上に写っている選手が、次に何をすべきかを判断させ、あるいは、テーブルにランダムに置かれた4枚のカード（プレーの様子が写真として描かれている）を時系列的に並び替えるテストも行われた（男子のみ）。最後は、パソコンの画面上に「矢印」が現れ、それをパソコンのシフトキーで画面と同じ向きの矢印を選択し反応スピードを計測した（女子のみ）。このような方法で各国の全情報を集め、INASのクラス分けの専門部会とマドリッド工科大学の研究チームが近いうちに分析結果を各国に送付する予定である。これらの試みは非常に革新的であり、知的障がい者のパラリンピック復帰への足掛かりになる事に期待を寄せるが、いくつかの疑問も残る。例えば、今回のテストにおいても日本選手に対しテストの方法を通訳を介して説明する際に、どこまで説明をするべきかの判断に窮する場面が何度かあり、適正なテストになっているか不確かであることは否めない。また、今回参加した選手たちの傾向は分析結果として明確になるが（例えば健常者と比べて判断スピードや正確さに有意差があるかどうか）、こうして得られた知見をどのようにして、適合者（知的障がい者）かそうではない者かの判断に生かすかは、更なる研究・調査が必要となるであろう。

6. 審判のレベルについて

今大会は、国際ゲームでありながら Federation Internationale de Basketball amateur (FIBA) の管轄外で各国のナショナルレフェリーの帯同審判制で行われた。各国でも普段担当しているカテゴリーは様々で、年齢も33歳から58歳 (46.75 ± 8.94) までと幅広かった (表5)。また国際ゲームでは本来、3 パーソンメカニクス^{註6)}で行われるが、今回は2 パーソンメカニクスであった。更に、現地エクアドルの審判員の応援が少なかった為、全日において審判員の絶対数が不足していたと言える。

次に、14秒ショットクロック^{註7)}のルール^{註8)}の適用がなく、2014ルールと2015ルールが混在するローカルルールの採用であった為、特に時間に関して T.O^{註8)} が主導権を握る運営であった。

ゲームを行う際には、テクニカルチェアマンやレフェリースーパーバイザーそして T.O チームが何組もいるが、今大会はスーパーバイザーが2人、T.O チームは1組という現状であった。審判員専用の控室や更衣室もなく、トイレで着替えることもあり、試合に臨む環境としては厳しいものであったと言えた。また、試合中の判定に関して、トラベリング (バイオレーション) は基準として一貫していたが、3秒オーバータイムはほとんど吹かれていなかった。

パーソナルファールは、イリーガルな手に関して目に映る大きなオンボールの手は吹かれていたが、オフボールの手^{註9)}やシリンドー^{註10)}を犯している手については“ばらつき”が見られた。オフェンスが触れ合いの責任を犯しているにもかかわらず、ディフェンスのファールになったり、シリンドー上に手を挙げている選手がショットファールを取られたりと選手やコーチが納得できていないケースも数多く見受けられた。

更にレフェリーミーティングがなかったため、今大会での基準や取り組むべく統一目標が示されなかった。また、プレカンファレンスやゲームカンファレンスそしてポストカンファレン

表5 帯同審判の国別人数

国名	男性	女性
日本	1	0
ベネズエラ	1	0
ポーランド	1	0
オーストラリア	0	1
エクアドル	3	1

スも不十分なため、次ゲームの運営に活かすことができなかった。そこで、今大会においてテクニカルファール^{註11)}を取ったケースをいくつか具体的に挙げる。

- ① プレイヤーによっては、判定を理解できずに不満を言動に表した。
- ② ファールを受けたことで興奮が収まらない。勝手にベンチに戻ったり勝手に控室に行ったりした。
- ③ 自らミスをしたことや仲間にミスを指摘され、壁を蹴る・叩く、泣き出すプレイヤーがいた。
- ④ 自閉的傾向を持つプレイヤーは、大きな音への恐怖心があり、傍でのホイッスルに過敏な反応を見せた。

など、健常者では見受けられないケースがあった。本来ならばコーチの指導により収まるケースも興奮が収まらないなど運営の難しさやテクニカルなケースについても考える余地があるように思う。今後、3×3がグローバル大会の主ゲームとなるならば、2メンメカニクスのゲームとし、ファールやバイオレーションの基準についても統一した基準づくりをしていかねばならない。

7. 大会運営上の問題

1) 会場の変更

当初、用意されていた会場は、屋外に設置された会場であり、フロアは通常の板ではなくコンクリートであった。気温は30℃を上回っており、更にT.Oに最低限必要な機材は確認されず(電光掲示板や24秒計測等)、通常試合ができる環境ではなかった。また、幾度となく事前確認していた練習ボールは用意されておらず、急遽用意されたボールはゴム製のボール1~3個程度であった(男女とも)。以上の様な環境下で、日本選手団はグワヤキルに到着後すぐに練習を行った。そしてその日の夜、大会本部から会場変更を伝えられた(写真2)。

2) 入館制限について

当初提出を義務付けられていたアクセディテーションカード^{註12)}の提示は入館時に課せられず、会場内には誰でも入館することが出来、且つ大会期間中一度も身分の提示も行われず、安全上の観点から大きな不安を抱く結果となった。また、第1試合目(朝10時開始)の90分前にも関わらず、体育館自体が開錠されておらず、日本選手団は体育館の外で待機することが幾度となく発生した。



写真2 変更後の会場

3) 試合時間等の変更

特に女子は、ラウンド2からフランスが棄権したため、対フランスと組まれていた試合以降は全て繰り上げし、大幅な時間変更がなされた。また男子も、15分前後の試合時間の変更は頻繁に行われた。さらに、男女とも予選ラウンド終了後、本来であれば決勝トーナメントへと移行されるはずが、予選ラウンドで暫定順位が決定しているため、当初予定されていた決勝ラウンド初日に予選ラウンド1位と2位で決勝戦を行い、3位と4位で3位決定戦を行い最終的な順位とした。更に男子に関しては予選5位（日本）と6位（ポーランド）のチームは、順位決定戦は行わなかった。この大幅な試合日程の変更の理由としてINASは、帰国際の輸送手段の確保に対する不安と選手の体調を理由に挙げていたが、この判断に対しポルトガルチームは、INASに対しメールにて強く抗議した。一方、審判の試合スケジュールは、当初、当日の朝来館した際にその日のスケジュールが伝えられたが、大会3日目以降は、前日の夜メールにて個人的に提示された。しかし最終的には、大会を通じたスケジュールは提出されることがなく、改善されることはなかった。

4) T.Oのレベル

前述の通り、直前に会場変更等が発生したためか、T.Oに関しては、人手不足等の影響で、ある特定の関係者が連日終日行っていたため、度々スコアの記載ミスや各種ジャッチの遅延等、明らかな人的ミスが多く発生した。また通常、試合終了後、両チームにスコアシートが配布されるのだが、それも行われていないどころか、そのことを指摘する国は日本のみであった。さらに、会場には通称“モッパー”と言われる、選手が倒れた際に床を拭く作業を行う者が常時

配置されておらず（通常コートの対角線に1名ずつ配置）、その結果、試合が幾度となく中断する場面が見られた。

8. 各国の実力

男子は、優勝したベネズエラは攻守ともに他を圧倒する実力であった。2位のフランスも善戦したが、個人技と組織力を持ち合わせたベネズエラには一歩及ばなかった。両チームともレベルの高い試合を繰り広げ、さながら日本の大学TOPレベルの実力に相当すると思われる。また、日本を含む3位から5位のチームは、点差ほどの実力差は感じられなくレベルが拮抗していた。ただ、日本チームが一歩及ばなかった要因の1つとして、気持ちの切り替えが挙げられる。1つのミスに固執するあまりプレーが委縮してしまい、その後の試合の流れを決定づける場面が多くみられた。

一方、女子は事実上オーストラリアと日本の直接対決という図式になったが、前大会（2011）より力の差は感じられなかった（写真3）。前回大会と順位こそ同じであるが、今回は3×3という形式で行われた事を鑑みると日本の実力は上がったとの見方が出来る。何故なら3×3は体格の差が実力に大きく起因する為、体格に劣る日本チームは、戦術的にバスケットボールを展開できたと分析できるからだ。ただ女子はフランスが棄権するなど参加国の減少により、世界的なレベルの低下が危惧される。



写真3 試合後、オーストラリアチームと記念写真

9. ま と め

今大会を通じて、大会運営上の不備は枚挙にいとまがないが、バスケットボール日本代表チーム（男女）の成果に関して言えば、前回大会（2011）に比べると十分に改善・進歩しているように思える。男子は世界との体格のハンディを組織力で補い試合を組み立てる事が可能となり、一方女子は、個人技の習熟度が時折プレーで表現できたように感じた。しかしながら、頂点を狙うにはまだまだ実力不足であり、特に女子は今後もINASグローバル大会で3×3が行われる事を考えると、日本国内において、その普及と5×5とは異なる練習方法の確立（指導）が急がれる。

2019年の次回大会は、オーストラリアで行われる事が既に決定している。今大会以上の成績を残すためには、男子に関しては更なる組織的な戦術と速い展開下における正確なプレーが要求され、女子は外角からのシュートの精度向上が挙げられる。

最後に、前述の通り今回の日本代表派遣においては多くの資金が必要となった。特に団体競技であるバスケットボールは、個人競技種目に比べると選手・スタッフ等人数が多いため今後も同様のケースが考えられる。また、日本代表の活動は年間を通じて行われているが、慢性的な活動資金不足も否めない。日本代表が目指す組織的バスケットボールで世界と対等に戦う事を考えると、活動資金の確保が現在の合宿回数等を増やす事に繋がり、そのまま技術向上に繋がると言っても過言でない。

謝辞：本論文作成にあたり、審判のあり方に関して細部にわたる指導をいただきました玉木彰治先生に心より感謝致します。

註

註1) 国際知的障がい者スポーツ連盟 (International Sports Federation for Persons with Disability の略)

註2) 知的障がい者のスポーツを統括する国際知的障がい者スポーツ連盟 (INAS) が運営する国際総合大会。

註3) 高酸素機器は、小型高濃度酸素発生器「Oxy'z (オキシーズ)」を全30台用意し、各競技団体に貸出した。パルスオキシメーターは、全8台用意し、高酸素機器同様に各競技団体に貸出した。いずれの機器も事前に業者より取り扱いに関する説明会を実施した。

註4) 団体競技においては24カ国 (3地域) の参加が必須であり、個人競技では32カ国 (3地域) の参加が必須。IPCハンドブックに詳しく定義されている。

註5) 各国の競技団体。

- 註6) これまでバスケットボールは、長く2人体制の審判で構成されていたが、昨今では、3人体制(主審1名・副審2名)で行うようになってきた。但し、全ての大会(試合)において、3人体制を採用している訳ではない。
- 註7) ボール(シュート、パスあるいは最後のフリースローのボール)がリングに触れたのち、シューター側チームのプレイヤーがそのリバウンドのボールを取った場合は、24秒計は14秒からはかり始められる。(FIFA 競技規則2014参照)
- 註8) テーブル・オフィシャルの略。
- 註9) いわゆる、攻撃を行っている選手(つまりボールを持っている選手)に対するファールは認められたが、攻撃を行っている選手ではない攻撃側の別選手(主に逆サイドにいる選手)に対するファールは認められなかった。
- 註10) シリンダーの定義は、「手を普通に上に上げたときの手の平の垂直面から、うしろは尻の垂直面、両脇は腕と脚の外側の垂直面で囲まれた部分」のことを指す。
- 註11) コート上の選手が相手チームと接触することによるファールはパーソナル・ファールといい、それ以外のファールを行えばテクニカル・ファールと言う。具体的には、審判や相手チームへの抗議・暴言・挑発行為、怒りにまかせてボールや器具(ベンチなど)を蹴ったり殴ったりすることやゲーム進行に対する遅延行為、わざと倒れてファールを受けたように審判を欺こうとする行為を指す。
- 註12) 大会期間中、本人を確認するための身分証(ID)。通常、大会前に関係者は大会組織委員会等に申請し取得する。尚、選手は大会期間中、常に携帯しなければならない。